

道元禪とマインドフルネス (Ⅳ) —その情理と実践—

茅原 正

Dōgen's Zen and Mindfulness (IV)

Tadashi Chihara (Department of Psychology, Komazawa University, Japan)

KEY WORDS: Mindfulness, Awareness (kizuki), Just sitting (shikan-taza), Sloughing off Body and Mind (shinjin-datsuraku), Dōgen's Zen

さて、ここまで、只管打坐して身心脱落、道元禪、仏道・仏法を、別本「仏向上事」を基に探ってみたところ、その要点として、「ほとけ」、「こころ」、「われ」、「さとり」等が浮上した。このような「仏道」、「心」の問題に関連して、直に説かれているのが、上述の『眼蔵』諸巻である。

「仏法」そのもの、一般的用語としては、『正法眼蔵』最初期の「弁道話」に最多(54)の記述があり、「仏道」(1243)には、19の用例がある。「四禪比丘」(1255)に35例、「三十七菩提分法」(1244)にも25例と、使用例があるが、これらの巻は懷奘の書写であり、諸巻の関連する年代にも相当の隔りがある。

これに対し、「仏法」、とりわけ「心」に関わる法を説く上述の諸巻は『普勸坐禪儀』(1226)以後、15年を経た1240年前後に集中しており、道元禪、最盛期の「心」に関わる一貫した見解といえよう。取りあげた諸巻は以下の通りである。

- 1239年 即心是仏
- 1241年 心不可得
- 1242年 8巻(身心学道, 仏向上事, 阿羅漢, 夢中説夢, 海印三昧, 道得, 恁麼, 坐禪箴)
- 1243年 5巻(坐禪儀, 諸法実相, 見仏, 説心説性, 三界唯心)
- 1244年 2巻(発無上心, 発菩提心)
- 1245年 即心是仏(写)
- 不明 唯仏与仏

このうち「唯仏与仏」の巻は、道元没後、35年

が経過した弘安十一年(1288)に、発見された、永平寺所蔵の『秘密正法眼蔵』二十八巻本の中の一巻で、この年あらためて書写された。実際の制作の時期は不明であるが、仏道の根本問題に対する道元、晩年の熟脱の心境が展開されている。

『正法眼蔵』における「唯仏与仏」の用例は、「即心是仏」(1239)を初めとして、「三十七菩提分法」(1244)にわたる14巻中、年ごとに認められる。とりわけ「諸法実相」巻には、その用例が十数にも及ぶが、当面の「唯仏与仏」巻には、冒頭に、「ひとり仏に……唯仏与仏, 乃能究尽」と一例あるのみである。『眼蔵』全体のなかで、この「唯仏与仏」巻は独特な一巻と言える。文体は難解ではなく、ほとんどが和文で、仏法とは何か仏とは何か、さとりとは何かという仏教における究極の主題が、つらなり、重なり合って構成されている。すなわち、「さとり」、「ほとけ」、「われ」、「尽大地」、「仏行」、「法王身」、「こころう」、「仏のあと」等、道元禪における、最も根本にして重要な道理についての、端的なる解説である。

以下、「唯仏与仏」巻中、一節ごとに、頻繁にくり返される用語を基に、道元禪、仏道・仏法・心の問題を探ってみよう。

【唯仏与仏】

[01] 「仏法は、人のしるべきにはあらず。このゆゑに、むかしより凡夫として仏法をさとるなし、二乗(声聞・縁覚)として仏法をきはむるなし。ひとり仏にさとらるるゆゑに、唯仏与仏, 乃能究尽といふ。」「唯仏与仏」巻、冒頭のこの一文は、

『法華経』『方便品』の引用であり、道元仏道の根本に関わる重要な見解といえる。つづいて、「さとりよりさきにちからとせず、はるかにこえてきたれるゆゑに、さとりとは、ひとすぢにさとりのちからにのみたすけらる」。すなわち悟りとは、はるかに超越したところから現出するので、その悟りは、ただ悟りの力によってのみ支えられるという冒頭の一節には、「さとり」の用例が18ある。

[02] 「無上菩提（最高の絶対普遍の眞実智）の人にてあるをり、これをほとけといふ。ほとけの無上菩提にてあるとき、これを無上菩提といふ。……いはゆるその面目は、不染汗なり。……いかにも趣向（おもむき）せられず、取舍（はからい）せられぬ不染汗（もとより汚れていないこと）のあるなり。」、すなわち、彼れ是やの「おもむき」や「はからい」等のとらわれなき不染汗の在り様が「さとり」であり、この上なき眞実智を得て、無上菩提の実現するとき、その人は、すでに「ほとけ」であって、もはや凡夫の人、「われ」ではないという。

たとえば、「こころ」を合成している、地（賢）、水（湿）、火（熱）、風（動）の四大や、色（物質）、受（感受）、想（表像）、行（意志）、識（認識）の五蘊そのものを、わがもの「われ」だと思ひ込んではいけない。それでは「誰（のもの）」かと思ひ量ることもならない。

こういうことで、春秋花月の風情の心から、日常の行動すべてに及ぶ、思ひ込みや、はからいなど、とらわれの邪心なき、あるがままの観相そのものが、自己本来の面目たる「われ」なのである。[この節、「われ」10、「我」1、「こころ」3、「ほとけ」2の要語あり]

[03] ふるき人のいはく、……いかなるかこれ諸人の出身の道（自己の身の在り方を超出する道）と。……このときいふべし、尽大地（大地の全体）、自己の法身（絶対普遍、眞実そのものの現われとしての身体）なりと。

ある古人がいわれた。「大地全体は、そのまま自己の法身であるが、その“法身”にとらわれては、身うごきができなくなる。そのとき、そこから抜け出る道は、どうするか」と。…

「尽大地は自己の法身である」と、いへるときは、いふがよい。

また、いはれぬときは、ふつつりと、「道はぬ、道はぬ」といふがよい。

[法身7、いふ8]

[04] <現身度生>

ところで、いはぬいはぬの古仏がいつている。「いはぬいはぬ古仏のいへることあり、死のなかにいけることあり、いけるなかに死せることあり、死せるがつねに死せるあり、いけるがつねにいけるあり」と。……

これは、人があえて、そうさせるのではなく、ものごとが、おのずから、そのようにある、仏法の眞のすがたである。

こういうことで、法輪を転ずる（説法）にも、生死一如の仏智光明、死生一如の仏智音声があるのであり、これを生滅はなれた無生の知見（智慧・見識）という。

これは、ほとけがこの世に身を現わし、衆生を済度する（人々をこの世此岸の苦海から、あの世彼岸に救い、渡す）「現身度生」も同様であるとしるべきである。

この度に、仏法はきはめつくせりと、心うべし、説くべし、證すべし。現（現われ）にも身（仏身）にも、度（救い、渡し）のごとくありけると、聞くなり、説く也。……このむねを證しけるにぞ、得道のあしたより、涅槃のゆふべにいたるまで、一字をもとかざりけるとも、

説かるることばの自在なりける。

[現身度生4、生4、死4、度4、説4]

[05] <尽大地是眞実人体>

古仏いはく、尽大地是眞実人体なり、尽大地是解脱門なり、尽大地是毘盧一隻眼なり、尽大地是自己法身なり。

まず、「尽大地はそのまま、これ眞実人体」というその意は、全大地が仮りではなく、そのままわが身としてある、としるべきだ。

次に、「尽大地はそのまま解脱の門」というのは、

どうあっても、まとわり、しがらみ、関わりなどの束縛されることなきところを名づけた。

「尽大地」のことは、とき（時）にも、とし（歳）にも、こころ（心）にも、ことば（語）にも、したしく（深く関連）して、ひま（隙間）なく親密（親近・密接）なり。かぎり（際）なく、ほとり（辺）なきを「尽大地」といふべきなり。しかあるに、この「解脱門」にいらん（入）ことをもとめ、いでん（出）ことをもとめんにまた、う（得）べからざる（不可得）なり。「尽大地是解脱門」の発問をかへりみるべし。在らぬところを、尋ねばやとおもはんにも、（探し求めたところで）叶ふべからざるものなり（出来るはずはないのだ）。

さらに、「尽大地は、これ毘廬（^{びる}遮那・^{しやな}光明遍照・大日如来）ひとつのまなこ（一隻眼、正見する絶対的な目玉）なりとは、仏、一つのまなこと言っても、人の目玉のようなものと思つてはならない。人には目は二つあるが、まなこ（眼）という時は、ただ人眼というだけで、二つとか三つとは言わない。仏の教えを学ぶものも、仏眼とか法眼とか、天眼などというが、それが、いわゆる「目」であるとは習わない。今はただ、「仏の眼ひとつが、尽大地である」と聞くがよい。

仏眼には、多種多様の「まなこ」がある。三眼のときもあり、千眼（観世音菩薩）のときもあり、八万四千（無数・一切）のときもある。だから、仏のまなこがこのようである、と聞いても、耳を驚かせてはならない。

また「尽大地は、自分みずからの法身である」と聞くべきである。けれども、真の自己を見得るものは稀であって、ただ仏だけがそれを知っている。そのほかの外道などは、あらぬものばかりを“われ”と思ふのだ。これに対して、仏のいはれる自己とは、大地全体を示しているのだ。となると、みづから自己であると、しるも、しらぬも、自分でない大地は、どこにもないのである。このときは、前に「尽大地は自己の法身なり」といった、あのときの古仏にまかせるがよい。

〔尽大地 15、目・まなこ・眼 21、真実 4〕

[06] むかし僧ありて古徳（鎮修宝寿）にとふ、

百千万境一時にきたらんとき、いかがすべき。古徳いはく、莫萱也。……

いふところのこころ（意）は、百千万境（ありとあらゆる世間の出来事）が、一気に押し寄せてきても、どうあろうと、それを動かしてはいけない。それは即座の仏法であり不動の心であって、客観、対象の雑事現象ではない。

この言葉「莫萱他」は、表にあらわる「いましめ」ではなく、うちにひそむる「真実」と心うるがよい。管して相手にしようとも、どうにもならないものなのだ。「構わぬ、ほっとけ」。

この節、きわめて短小なるも、その説くところ「気づきのマインドフルネス」とは真逆にあり、道元禅、仏道・仏法に通ずる、端的なる一言としてとり挙げた。

〔こころう 2、こころ 1〕

[07] ふるき仏のいはく、山河大地と諸人と、おなじく生まれ、三世の諸仏と諸人と、おなじくおこなひきたれり。……

生のごとくにあらぬ山河大地よと、うらむるおもひなかれ。山河大地を、ひとしきわが生なりといへりけりと、あきらむべし。また三世諸仏は、すでにおこなひて道をもなり、さとりもをはれり。この仏と我とひとしとは、またいかにかこころうべき。まず、しばらく、仏の行を、こころうべし。…

「三河大地と人々とは、同じく生まれ、過去世・現在世・未来世の三世の諸仏と人々とは、ともに行じてきたのである。山河大地は、“生”の如くにはあり得ないと、古仏の言葉をうらんではいけない。そうではなく、山河大地とわが生とは、ひとしくあるのだということをも明らかにせよ。

また、三世の諸仏は、すでに修行を積んで、道をも成就し、悟りも終えている。そうした仏と自分とが等しいというのは、どう心うればよいのか、まずは、仏の行をこころ得るがよい。

仏の行は、尽大地とおなじくおこなひ、
尽衆生とともに、おこなふ。

もし尽一切にあらぬは、

いまだ仏の行にてはなし。

しかあれば、こころをおこすより

さとりをうるにいたるまで、

かならず尽大地と、

尽衆生と、

さとりも、
おこなひもするなり。……

これはこころうるをしへにては、
三世の諸仏のこころをもおこし、行ふは、
かならずわれらが身心をば、
もらさぬことわりのあるなりとしるべし。
しづかにかへりみれば、

われらが身心は、まことに
三世の諸仏とおなじく行ひける道理あり
発心しける道理も
ありぬべくみゆるなり。

しばらく道は知不知にはあらぬとはなづくべし。
[こころう 8, 三世諸仏 7, 山河大地 6]

[08] ふるき人のいはく、撲落も他物にあらず、
縦横これ論にあらず。

山河および大地、すなわち全露法王身なり。
古人は言っている。撲落（叩き落とす、打ち落とす）も、よそごと、他物にあらず、縦横無尽、自在にあれこれ論ずるところではない。山河及び大地は、総てがあらわの法王身（仏）である。

『石門林間録』巻上、興教寺小寿禅師（洪寿 944～1022）の偈、「撲落非他物、縦横不是塵、山河及大地、全露法王身」の引用。作務の薪とりの際、打ち落ち、飛散した薪の破片（かけら一々）が、仏のあらわれそのものであるという。

この偈を引いて道元は、更に次のようにいう。
「いまの人もむかしの人のいへるがごとくならふべし。……心うる法王ありける。

このこころは、山の地にあるがごとし、
地の山をのせてあるにいたり。

こころうるに、こころえざりつるをりの
きたりて、こころうるを
さまたげず。

またこころうるが、こころえざりつるを、
やぶることもなくして、
しかも こころうると

こころえぬとの、
はるのこころ、
あきのごゑあり……
こころうるは、こゑ（仏）すでに耳にいらて
三昧あらはるるをりにて
あるべし。……

わたくしに、おもひえたることにはあらねば、

法王のかくのごとくなりけるとしるべし。

法王の身とは、まなこも身のごとくにあり、
こころも身とひとしかるべし
こころとみと一毫のへだてなく
全露にてあるべし。
光明にも、説法にも、
かみにいふがとくに、

法王身にてありと、こころうるなり。

[こころう 12, 法身 6]

[09] <魚のごとく、鳥のごとく>

むかしよりいへることあり、いはゆる、
うをにあらざれば、うをのこころをしらず、
とりにあらざれば、鳥のあとをたづねがたし。
これをするやうは、魚と魚とは、かならずあひ
たがひに、そのこころをしるなり。ともにしられ、
おなじく、こころをひとつにするなり。……
鳥は鳥のあとをみるなり。

このことわりは、仏にもあり。……

仏のまなこにて、……

仏のみちのあとをば、たどりぬべし。

わがあとのあきらめるることは、

仏のあとをはかるよりうるなり。

このあとをうるを、仏法とはいふなるべし。

[しる 19, ほとけ 15, あと 14, こころ 5]

この「唯仏与仏」巻における、仏道の根本にかかわる重要な主題をあげれば、仏法の根本とは何か、仏とは何か、さとりとは何か、というようなことになるが、これらの主題が互いに連なり、重なり合って展開するのが、この巻の特徴である。

また、この巻の文節に類出する要語をみると、以下のようになる。

[01]	さとり	18			
[02]	われ	10	我	1	こころ 3
	ほとけ	2			
[03]	法身	7	いふ	8	
[04]	現身度生	4	生	4	死 4
	度	4	説	4	
[05]	尽大地	15	目・まなこ・		
			眼	21	真実 4
[06]	こころう	2	こころ	1	
[07]	こころう	8	三世諸仏	7	三河大地 6

[08] ころろう 12 法身 6
 [09] しる 19 ほとけ 15 あと 14
 ころ 5

すなわち、「唯仏与仏」巻は、斯くある言葉のくみ合わせ、つみ重ね、くり返しによって、仏道の根本である「仏法・ほとけ・われ・心・さとり」など、説法されていることが分かる。したがって、道元の多用する言葉が、一体、何を意味するのか、また、いかに読みとり、どう受けとるか、これが最も肝心で、道元仏道－仏法の審究、尋究は、これに尽きるといえよう。

ところで、「仏法」については、先の別本「仏向上事」において、「仏法といふは、いわゆる万法なり、百草なり、諸法なり、三界なり」と具体的かつ簡単な説示があったが、この「唯仏与仏」巻においては、「尽大地のことは、ときにも、としにも、ころにも、ことばにも、したしくして、ひまなく親密なり、かぎりなく、ほとりなきを尽大地といふべきなり」、あるいは、「山河大地と諸人と、おなじく生まれ、三世の諸仏と諸人と、おなじくおこなひきたれり」というように、「仏法」、そのありようにまで論が及んでいる。

真の自己になるときに、おのずから、「仏とわれとは等しい」という声が聞こえてくるという。この「声」は、もはや人ではなく、仏のはたらきであろう。結局、仏法－仏－われ－さとりとは、「ころ」をめぐる同一の問題なのである。

さて、巻末の近くになって、道元はこういう。「山河および大地すなはち全露法王身なり」、といった古人があるが、「ころろうる法王身」、この意味するところを学ぶべし、と。すなわち、ころろうるは、「こゑすでに耳にいりて、三昧あらはるるをりにてあるべし」という。

要するに、法王身、「ほとけのこゑ」は、三昧においてあらはるるのである。ほとけのこのこゑは、耳で聞いて“気づく”のではない。三昧において“ころ得”のである。法王身（仏身）とは法応心（仏心）であり、すべて、ほとけ・ころろにまかせなのだ。「ころろう」のは、「わたくしのおもひえたること」ではない。只管打坐する道元禪、さりげなく、なにげなしの、この一言は、実に重大なることと言わざるをえない。

そして最後は、「仏法は人の知るべきにあらず」と冒頭にしめした、この巻の結するところ、「わがあとをあきらめらるることは、仏のあとをはかるよりうるなり。このあとを、仏法とはいふなるべし。」ということであった。

「唯仏与仏」巻と同じく、『法華経』『方便品』を冒頭に引き、ころろう（心得）唯仏与仏、並びに諸法実相について言及するものに、小巻の「阿羅漢」がある。

阿羅漢は、声聞ともいわれ、縁覚（独覚）とともに、小乗二教の一つである。修行完成した小乗の聖者は、パーリ語でアルハン Arahant, サンスクリットでアルハット Arahat と呼ばれ、その音写が「阿羅漢」である。その意味するところは、原意からして、大旨、「供養を受けるにふさわしい人、尊敬されるべき人」となるが、そこから意識して、単に、修行完成して悟りを得た聖者、真人となすところが大である。

また、阿羅漢は、小乗の仏道修行、「四果」(須陀洹果 = 預流果・斯陀含果 = 一來果・阿那含果 = 不還果・阿羅漢果 = 無學果)の最高位であり、修学すでに成って、また学ぶべきところなく(無學位)、世の供養を受くるに^{あた}る位にいたれる者、ということから、「応供」^{おうぐ}、「応」^{おう}と称されることも多い。

これを以って「阿羅漢」となすのが小乗仏教の考え方である。しかるに、この小巻では、二乗、小乗を^{へんげ}下する、大乘禪の道元が、二乗作仏を説く『法華経』にもとづき、「煩惱尽きはて、心自在無碍」の解脱の人、すなわち「阿羅漢」を解説する。また、この巻の最後に道元は、『法華経』『方便品』および、圓悟、百丈兩禪師の語をとりあげ、さらに、阿羅漢の本質とそのありようについて論じている。道元のいう「真の阿羅漢」とは、一体、何か。以下、その問いを探ることにしよう。

【阿羅漢】

[01] 〈阿羅漢とは何か〉

諸漏己尽、無復煩惱、
 逮得己利、尽諸有結、
 心得自在。

まず、『妙法蓮華経』『序品』の一句が示され、

つづいて「これ大阿羅漢なり、学仏者の極果なり、第四果となづく。仏阿羅漢なり。」とあり、仏道の究極的、自在無碍な在り方を得た、「第四果（預流果・一來果・不還果・阿羅漢果）」の聖者を、「これ阿羅漢なり、仏阿羅漢なり」と言う、道元独自の阿羅漢論が展開する。

「諸漏（諸々の煩惱）が已に尽き、復た煩惱なし。「逮得己利（自己の利益を捕え得た）」とは、頭のとっぺん真骨頂、ほとけの真髓ありのまま、自在無碍なる出入体得をいう。尽諸有結（もろもろの束縛を尽す）とは、「尽十方界不曾蔵」（十方世界ことごとく、蔵さるものはない）ということである。

さらに、「心得自在」のありようは、「高処自高平（高い処は自ら高く平らである）低処自低平（低い処は自ら低く平らである）」とし、るがよい。だから、墻壁瓦礫（垣根・壁・瓦・石ころ）など、さまざまな事物、現象がそのままにあるのだ。

心が「自在」というのは、「心也前機現」（心のすべての働きが自由に現われ出ること）である。「無復煩惱」（復た煩惱なし）というのは、もとより煩惱は生じていない「未生煩惱」ということであり、言うならば「煩惱被煩惱礙（煩惱が煩惱に妨げられて、煩惱の用をなさない）」のことをいう。これについては西有穆山（1821～1910）の明解なる注解がある。「これは煩惱になりきることだ。さて、なりきる時に煩惱が無くなる。ああ、これが煩惱じゃ、これを起してはという二物になる。余念になる。全く全身煩惱になりきった時に、煩惱が自ら脱落するのである。元来、煩惱には自体がない。ゆえに当処に脱落である。これを煩惱被煩惱礙という。」（『正法眼蔵啓迪』）

阿羅漢の神通・智慧・禅定・説法・化導・放光等、さらに外道・天魔などと比べられるものではない。また、阿羅漢は「百仏の世界を見る」などいわれるが、そういう凡夫の見解に、決して習い準じてはならない。

阿羅漢といえば、「將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡」（將に謂えり胡鬚赤きを、更に赤鬚胡有り）の道理なのである。つまり、「胡人（異国の人）の鬚は赤い」という通念の所を、さらに所かわって、「赤い鬚の胡人」というようなもので、つづまる所、阿羅漢は、やはり阿羅漢なのである。

[02] 古云、我等今日、真阿羅漢、
以仏道声、今一切聞。

ここで「今一切聞」というのは、

「今一切諸法仏声」（ありとあらゆるものをして、仏の声を聞かしめる）ということである。それは、諸仏や弟子のみに限ったことではない。有識有知、有皮有肉、有骨有髓、など識・知・皮・肉・骨・髓のすべてのもの、一切をして聞かしめるを「今一切」という。

「有識・有知」（意識あり知覚あるもの）とは、国土・草木・墻壁（垣根や壁）・瓦礫（かわらや小石）までもが含まれる。さらには、草木衆生の揺落盛衰（揺れる・落ちる・栄える・衰える）から生死去来（生まれる・死ぬ・去る・来たる）など、ことごとく、仏の声を聞いているのである。そして、「以仏道声、命一切聞」（仏道の声で以て一切をして聞かしめん）という、そのわけ由来は、渾海（全世界）が、すべて耳根（聴覚）にのみ依つてある、と学ぶだけではいけない。耳の外、眼・鼻・舌・身・意、心のすべての働きを、自在に現出させること、即ち、心、自在を得ることになる。

[03] 〈如来は菩薩を教化する〉

釈迦牟尼言、

若我弟子、自謂阿羅漢。辟支仏者、
不聞不知諸仏如来但教化菩薩事、
此非仏弟子、非阿羅漢、非辟支仏。

仏言但教化菩薩事は、我及十方仏、
乃能知是事なり。

唯物与仏、乃能究尽、
諸法実相なり、
阿耨多羅三藐三菩提なり。

しかあれば、菩薩・諸仏の自謂も、自謂阿羅漢
辟支仏者に一齊なるべし。

そのゆゑはいかん、自謂すなわち
聞知諸仏如来
但教化菩薩事なり。

これは、『妙法蓮華経』「方便品」からの引用である。仏のいう「但教化菩薩事（但だ菩薩を教化したまう事）は、「我及十方仏、乃能知是事（我及び十方の仏、乃ち能く是の事を知る）」である。唯物与仏、乃能究尽、諸法実相（唯だ仏と仏と、乃ち能く諸法実相を究め尽す）であり、無上等正覚の阿耨多羅三藐三菩提である。

かくして、前の「唯仏与仏」巻において浮かび上がった、「こころ得」、「唯仏与仏」、「諸法実相」等、道元禪、仏法の根本たる拠が、この小巻でも、はや端的に示されているが、この後は、道元独自の「阿羅漢」論がつづく。

[04] 古云、声聞経中、称阿羅漢、名為仏地。

『魔訶止観』からの引用であるこの一句について、「これ仏道の證明なり」、「仏道の通軌（通則…すべてに通ずる道すじ）なり」、「阿羅漢を称して仏地（仏の境地）となす道理を参学すべし、また仏地を称して阿羅漢とする道理を参学すべし」という。阿羅漢のほか、一塵も一法も、余分のものは何もない。正に、阿羅漢が担って来たるそのときは、不是心、不是仏、不是物なり。仏眼や観不見（仏眼も也た観れども見えず）で、仏眼でさえ、うかがいしれぬ。ともあれ、「抉出眼晴」、仏の目玉をめぐり出す力を参学するがよい。それ以外のすべてのものは、全く余計な残りもの（剰法渾法剩）である。

[05] 釈迦牟尼仏言、是諸比丘・比丘尼、
自謂已得阿羅漢、是最後身、…

いはゆる阿耨多羅三藐三菩提を能信するを
阿羅漢と称す。心信此法は、付属此法なり。…
志求阿耨多羅三藐三菩提は、弄眼晴なり、
壁面打坐なり、
面壁開眼なり。
徧界なりといへども、神出鬼没なり。
亘時なりといへども、互換投機なり。…
かくのごとくなるを、
志求阿耨多羅三藐三菩提といふなり。

[06] 來山圓悟禪師曰く、古人旨を得るの後、
深山・茆茨（茅と茨）・石室に向きて、折脚の鑊子（鍋）もて飯を煮きて喫すること十年二十年、大いに人世を忘れ、永く塵界（俗世間）を許す。今時のわたしはあえて此の如くなるを望まず、ただ名をつつみ、跡をくらまして本分を守り、一箇の、やせこけた骨ばかりの老僧となって、おのずから証る所にかない、己が力量に随って、受用する、古い宿業を消し去り、こびりついた習わしを流そう。もし、余力があれば、進んで人に及ぼして、

般若の縁を結び、己れ自身を練磨して、身心熟脱せんとする。それは正しく荒草に、一箇半箇の学人（非常に少ない真の人）を見出すようなものなのだ。そういう得難い人たちと、ときに生死を脱却し、進んで未来に利益して、仏の深思に報いたい。こうなれば、抑えようとも已むをえず、霜露果熟があるように、法熟、押されて出世して、縁に応じて順適す。しかるに有求の心なし。ましてや貴勢（貴族の勢力）に依りかかり、世俗の師家とあいなって、たちふるまいで、凡人を、あざむき、聖者をないがしろ。利をもとめて名を図り、無間地獄の業（なりわい）を、どうして作ることができようか。

「たとい、機（人の資質）に恵まれ、縁（条件）に出会うことが出来なくても、ただ、ありのままに世を度り、前業果報のわずらいなければ、それが俗界超出、真の阿羅漢であろう。」という、圓悟禪師の言葉につづいて、道元はつぎのようにいう。

しかあればすなわち、而今の本色の衲相（今、ここでいう所の本当の僧侶）、これ、真出塵阿羅漢なり。阿羅漢の性相（本性・様相）をしらんことは、かくのごとくするべし、西天（インド）の論師のことばを、妄計（分けもなく、むやみやたらに推しはかる）することなかれ、東地（中国）の圓悟禪師は、正伝の嫡嗣（正法を正しく受け継いだ仏祖）である。

結局、この小巻「阿羅漢」において、圓悟禪師が縷縷のべたる“真の阿羅漢”とは、道元そのものの自体の表現であり、対する「而今の本色の衲僧」という道元の言葉も、自身の表出に外ならない。

[07] 洪州百丈山大智禪師云
眼耳鼻舌身意、各各不貪染一切有無諸法、
是名受持四句偈、亦名四果。

自己にも他己にも関わらぬ只今此の眼・耳・鼻・舌・身・意の働きは、徹頭徹尾（頭正尾正）、はかり究むるものではない。だから、全身おのずから、そのまま不貪染（一切の染汗を脱した純なる清浄）で、さまざまの有るもの無いものすべてに染汗がない。四句偈（諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂）の受持はそっくり「不貪染」と言うのであり、また「四果」と名づけるが、四果は、すなわち阿羅漢である。

結局、どういったらいいのであろうか。敢て言うならば、こうも言えよう。

羅漢が凡俗の境地にあるときは、諸法がかれを妨げる。

羅漢が聖者の境地にあるときは、諸法がかれを解脱せしめる。

知るがよい。羅漢と諸法と同参なり。

既に阿羅漢を証すれば、阿羅漢を礙えうる。

(阿羅漢が阿羅漢くわんになったのだ)

それゆえに、阿羅漢とは空劫くうこく己前の老拳頭、すなわち、宇宙始源の空王のにぎりこぶし、自己本来の面目である。

道元は、真まことの阿羅漢、すなわち、仏と仏ただひとひのあり様は、極め尽すというならば、(乃能究尽)、ありとあらゆる存在が、心得自在に本来の、己れ自信を実現する(諸法実相)ところだという。これは、実に「唯仏与仏、諸法実相」であり、この「阿羅漢」は、『法華経』を基にした、道元自身の「声明」、「案内」ともいえよう。さらにまた、この「阿羅漢」は「唯仏与仏」と「諸法実相」との“仲立ち”役をなしている。此処においても此の次は、「諸法実相」巻をみてみよう。

(未完)